

「久良伎史料の解釈と保存」

竹内 豊

1 はじめに

阪井久良伎翁は、川柳中興の祖として良く知られている。「川柳＝狂句」「川柳＝猥雑なもの」という当時の社会風潮に異を唱え、川柳の本道を世に広めるべく尽力した。本来の川柳は、社会の協調感から生まれる総合美感の詩であるとして、川柳界以外の美術、書道、生け花、音楽、舞踊、演劇等の各界と積極的に交流し、川柳の本道を生涯をもって体現した。活動の一環として、あらゆる機会を捉え揮毫、数多の染筆を残した。今尚市場に多くのものが散見されると聞く。

平成14年(2002年)10月14日に、阪井久良伎翁の最後の遺児である三男の望氏が亡くなった(享年96)。遺品を整理した結果、和歌、書を中心とした久良伎翁の遺筆が200点以上、また写真が数点見つかった。

現在、それらは形見分けにより散逸したが、散逸する前に全作品を電子データ化できたので、これらのデータを史料として検証し、川柳史に若干の知見を提供したいと思うものである。

今回は第一報として、これらの遺筆の一部を紹介する。

2 電子化した遺筆

(1) 遺筆数：合計245点

(内訳)

種別	数
条副	188
色紙	40
短冊	9
団扇	2
冊子	1
柳誌原稿	5
合計	245

条副、色紙については、書き損じたものを含む。

(2) 年代：明治45年～昭和20年

晩年のものが中心(69歳以降)

3 遺筆の紹介

(1) 色紙

女狐の管を巻く頃春に成り

大正乙丑（きのとうし：14年）元旦、王子扇屋狐火川柳会で詠まれたもの。有名な句。雅号は「久良岐」が用いられている。落款は不鮮明だが字の形から「久良岐」と思われる。



一日でぶどうにあきるとこ甲府

年代不詳だが、落款を見ると「古稀久良伎」と読めるので、昭和13年頃（70歳）のものと思われる。古稀の祝いに甲府に招かれたのか、川柳的なアイロニーで葡萄に飽きたと言いながら、甲府での歓迎に満足している様子が伺える。



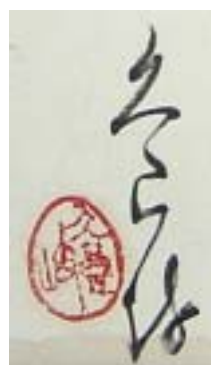
甲府は、篠原春雨という久良伎の有力な弟子が居

た所で、春雨氏は古句研究の一人者である。彼は山梨川柳会を創立、さらに「川柳さんにち」などの川柳誌で山梨県内に川柳愛好者の裾野を広げて行った。また、主宰する「川柳常会」で同県内の愛好者の指導を行った。「川柳さんにち」には久良伎翁も作品を寄せている。



海水着見せに来たのはしゃがむ丈

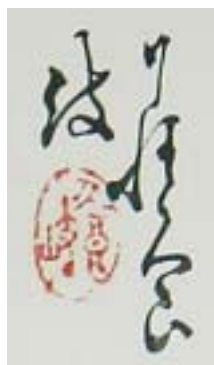
これも年代不詳。伊藤長甫氏の話をもとに川柳に詠んだもの。雅号を見ると「久良伎」だが、落款は「久良岐」となっている。雅号と落款が一致しない作品。



鎌倉で見ると三日月有難し

これも年代不詳。雅号と落款が一致しない遺筆。

なお、似たような句想の作品で、「ろうそくで見ると太夫も有難し」の句がある。

**世田谷で松と紅葉の敵同士**

久良伎翁75歳(昭和18年頃)。文字の代わりに絵で表現した遺筆。

「病」の文字が見え、体調を崩している様子が伺える。心なしか、全体的に勢いがいいように見受けられる。落款には本名である「坂井辨(弁:わかち)印」を使っている。

**(2) 条副****杜若江戸の燕がぬれて来る**

大正甲子(きのえね 13年)6月15日の遺筆。

堀切菖蒲園において、久良岐社主催で第一回川柳八ツ橋会が開催されている。この会で、久良伎翁は自作の新曲清元杜若を披露している。

「紫を見れば京でもあきれべい」の古川柳、「紫の一本故に武蔵野の草はみながら憐とぞ思ふ」の古今集の和歌から、紫と江戸と杜若の連想、そして濡燕と杜若が燕子花からの連想、鞆当の名古屋山三の衣装の模様と堀切菖蒲園の菖蒲と杜若との連想から作られた句。この濡燕は久良伎翁自身を象徴し、失われた江戸への哀愁や憤りを表現したと述べている。

堀切菖蒲園は、文化年間(1804~1817)当地の農民、伊左衛門によって栽培されたのが始まりと伝えられ、花の種類も約2百種6千株に及ぶ。江戸時代の有様をしのびながら、数多くの江戸花菖蒲を鑑賞できるのが特徴。

6月中旬頃が花の見頃とされている。

吉原に見返柳丈の江戸

先の「世田谷」の句と同様、文字の代わりに絵を使ったスケールの大きい遺筆。

久良伎翁は関東大震災以前の吉原を愛した。本来の吉原は、階級や貧富の垣根が取り払われ、遊ぶ側にももてなす側にも相応の教養があり、趣味や芸術や心意気を競い、また語らう場であった、とのこと。そこには、不文の憲法があり、通人の規則があり、社交があり、礼譲があり、趣味があった、と翁は往時を偲ぶ。

この遺筆も年代不詳だが、雅号に「久良岐」を使用していることや、句が作られた背景を考えると、昭和元年前後のものと推定される。

日本の背骨の上を這歩るき

昭和丁丑（ひのとうし 12年）。

他のものと比べると、こざっぱりして品良く仕上がっている印象を受ける。

天照（あまてらす）道は一万三千里

久良伎翁69歳（昭和12年）。

昭和天皇が摂政時代に外遊し、帰朝した日に詠んだ句だが、「奉りし川柳」ということから、この軸を献上した可能性もあると思われる。外遊の行程が13000里であったということ、神様のアマテラスに掛けて、雄大な出来になっている。

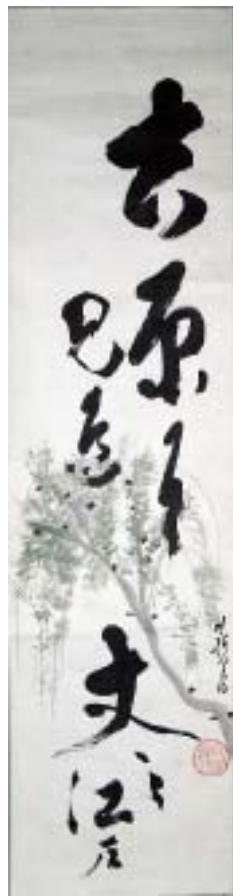
珍しいのは、本名を署名していることで、このことからこの軸を書くに当って、極めて畏まった構えであったと想像される。署名の構成も「川柳詩客坂井辨（弁：わかち）謹詠」という構成で、通常のものとは違う晴れの作品である様子が伺える。

一生を個人思想へ体当り（其の一）

昭和20年元旦、久良伎翁77歳。晩年の遺筆。

一生を個人思想へ体当り（其の二）

昭和20年1月24日、誕辰会。久良伎翁77歳。今回発見された遺筆の中では最晩年のもの。



-1



-2



3 まとめ

以上、遺作の一部を駆け足で紹介したが、久良伎翁が説くところの「川柳の本道」の一端が伺える。言葉の選び方にセンスがあることは勿論のこと、字の配置やバランス、更には画との兼ね合いの素晴らしさを染筆全体から感じ取ることが出来る。すなわち、句、書、画、更には何も描かれていない空間、それら全体から受ける総合的な美があると思われる。

久良伎翁の説く「川柳の本道」の要旨は、以下のとおりである。

- ・ 社会的地位や立場を超えた、協調共感から出る閃き（社会共有、交歓の詩）。
- ・ 絵画、書、音楽、舞踊、演劇等の総合美。
- ・ 個人思想の詩ではなく、没個性の詩。
- ・ あくまでも社会生活の中での情感の機微に触れる交流の文芸。（自然の中に独りで居る俳句との違い）
- ・ 対立や孤立ではなく、協調融和の朗らかなさが川柳の心。他の美点長所も認識する、修養と大きな度量が必要。
- ・ 古川柳について、知識としての語句の研究ばかりではなく、当時の政策や、考え方、情感を知り、学ぶことが大事。

彼の主張するところは、江戸の街で培われた朗らかな和の心を見直そうということであり、川柳を通して、修養を土台とする豊かな情感の復興を目指していたと思われる。川柳とは、単なる艶笑や語呂合わせではないのに、世間はそれだけに没頭して百年過ごしてしまい、また、それが川柳だと思ってしまう。川柳の本質が失われつつあるので、今こそ本質を取り戻さねばならないという使命感があり、それを実践した。

そうした動きの中で、これを判りやすく説明するものとして、世間にいつしか「狂句百年の負債を返せ」というスローガンが生まれてきたと思しい。

現在、我が国は物質的には恵まれているが、情感的に乏しいと言われて久しい。物質的な豊かさよりも、個人の心のあり方が問われている。久良伎翁が没して60年が経った今、「豊かな情感」「総合美」という観点から、川柳を見直してみることも必要かと思われた。

4 今後の課題

今回は、第一報ということで、川柳のものを取り上げた。今後は他の遺作も含め一通り読解し、年代順に整理することを第一の課題に挙げたい。その他、以下の点を中心に久良伎翁の世界を掘り下げて行きたい。

- (1) 落款と雅号の関係の解明。
- (2) 久良伎翁の崩し字見本の作成。
- (3) 川柳においては、句意とその背景や成立ちの考察。

(4) 鑑賞(字の配置やバランスの考察。画との関係の解釈等)

(補足) 史料の保存について

今回発見された200点以上の遺作は、天井裏や天袋の奥から、ダンボール箱に詰められていたり、新聞紙に包められた状態で保存されていた。高温多湿の劣悪な環境下に長年置かれた結果、折れ、染み、破れ、虫食いによる痛みが激しく、美術的価値を損なってしまったものが少なからずある。

これは、遺族が遺筆を持って余してしまうことが、直接的な最大の要因と思われる。染筆の保存に経費が掛かるのも現実的な問題であり、個人がこうした文化財の保存にまで経費を掛けるのは難しい面がある。更に大きな枠で捉えると、文化財として国の保護を受けられない、つまりは、川柳が一芸術として社会に認められていないことが大きいとも言える。

川柳が、一芸術として社会に認められるかどうかは各個人の研鑽によるが、それまでの間、こうした文化財を保護する専門機関が望まれるところである。

